

## 動詞 *rob* の補部構造に関する通時的考察\*

入学 直哉<sup>\*1</sup>

### A Diachronic Study of the Complementation of the Verb *rob*

Naoya NYUGAKU<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> Organization for Fundamental Education

In Old English, verbs of deprivation like *bereafian* (>PE *bereave*) occurred in the double object construction when they had two complements. The two objects that appeared in the construction were the accusative and the genitive or the accusative and the dative. Besides the double object construction, the prepositional constructions, i.e., the *of*-construction and the *from*-construction, arose in the Middle English period due to the leveling of inflections. The *of*-phrase and the *from*-phrase originated from the genitive case and the dative case respectively. In Middle English, the verb *rob*, which was borrowed from French, occurred with the *of*-construction and it also appeared in the double object construction. However, in the Early Modern English period, the verb almost completely faded away from the double object construction because the constructional meaning that the construction in question bears is 'X CAUSES Y to RECEIVE Z' (cf. Goldberg (1995:49)) and the meaning the verb *rob* denotes could no longer go with the constructional meaning that the double object construction carries. In Present-day English, some examples of the 'NP<sub>1</sub> rob NP<sub>3</sub> from NP<sub>2</sub>' form can be found in COCA, though the syntactic structure is prescriptively ungrammatical.

**Key Words** : the verb *rob*, complementation, the double object construction, prepositional constructions

## 1. 緒 言

現代英語において「奪取」や「除去」などの意味を表す動詞は、各々の動詞が取る補部構造の形式により、以下のような3つのタイプに分けることができる。<sup>1</sup>

- (1) a. Henry cleared dishes from the table.  
b. Henry cleared the table of dishes.
- (2) a. The thief stole the painting from the museum.  
b. \*The thief stole the museum of the painting.
- (3) a. \*The doctor cured pneumonia from Pat.  
b. The doctor cured Pat of pneumonia.

(Levin (1993:52))

(1a)では動詞 *clear* は除去という行為の対象となる移動物を直接目的語に取り、移動物の移動の起点となる場所を *from* 前置詞句によって示している。他方、(1b)では *clear* の直接目的語の位置に場所名詞が生起し、移動物は *of* 前置詞句によって標示されている。(1a)と(1b)はいわゆる所格交替(*locative alternation*)と呼ばれる構文交替を行っており、*clear* は所格交替に参加する交替動詞である。ところがすべての除去・奪取動詞が所格交替を認可するわけではなく、例えば動詞 *steal* は(2a)のように被奪取物を直接目的語に取り、場所名詞を *from* 句で標示する *from* 前置詞構文には生起可能であるが、(2b)のように *of* 前置詞句と共に生起した場合は非文となる。他方、(3a)-(3b)のように *cure* は *from* 前置詞構文は取らず、*of* 前置詞構文のみに生起する。また、これらの除去・奪取動詞は(4)に示

\* 原稿受付 2019年3月29日

<sup>\*1</sup> 基盤教育機構

E-mail: nyny@fukui-ut.ac.jp

す通り二重目的語構文に生じることはできない。

- (4) a. \*Henry cleared the table dishes.  
 b. \*The thief stole the museum the painting.  
 c. \*The doctor cured Pat pneumonia.

典型的な奪取動詞の一つである rob は、(5)に示す通り、(3)の cure と同様の統語的振る舞いをする。即ち、被奪取物を直接目的語の位置に置き、被奪取者を from 前置詞句で標示する(5a)は非文となり、被奪取者を直接目的語に取り、被奪取物を of 前置詞句で示す(5b)が正文となる。<sup>2</sup>

- (5) a. \*Jesse robbed a million dollars from the rich.  
 b. Jesse robbed the rich of all their money. (cf. Goldberg (1995:45))

また他の除去・奪取動詞と同様に二重目的語を取ることもできない。

- (6) \*Jesse robbed the rich all their money.

現代英語において動詞 rob は上で述べたような統語的制約を受けるわけであるが、OED を調査すると歴史的には以下に示す通り、実に多様な補部構造を取っていた言語的事実が存在する。

- (7) NP<sub>1</sub> V NP<sub>2-PERSON</sub>  
 þe knihte þet robbed his poure men. (a1225 *Ancr. R.* 86)  
 (8) NP<sub>1</sub> V NP<sub>2-PLACE</sub>  
 Wes helle irobbed, & heuene beð ifulled. (c1230 *Hali Meid.* 15)  
 (9) NP<sub>1</sub> V NP<sub>2-PERSON</sub> of NP<sub>3-OBJECT</sub>  
 In an evil tyme our emperor Robbed King Richard of his tresour. (13.. *Coer de L.* 2286)  
 (10) NP<sub>1</sub> V NP<sub>2-PLACE</sub> of NP<sub>3-OBJECT</sub>  
 Mani cursed painem..hadden robbed þis cuntray Of al þis ich fair pray. (c1330 *Arth. & Merl.* 5105 (Kölbing))  
 (11) NP<sub>1</sub> V NP<sub>3-OBJECT</sub>  
 Hij robbeden tresores & cloþes. (13.. *K. Alis.* 3450 (Laud MS.))  
 (12) NP<sub>1</sub> V NP<sub>3-OBJECT</sub> from NP<sub>2-PERSON</sub>  
 I robbe his tresour from hym. (1530 *PALSGR.* 693/1)  
 (13) NP<sub>1</sub> V NP<sub>3-OBJECT</sub> out of NP<sub>2-OBJECT</sub>  
 There was a sideboard robbed out of the carved work of a church in the Low Countries.  
 (1850 *THACKERAY Pendennis* xxxvii[i])  
 (14) NP<sub>1</sub> V NP<sub>2-PERSON</sub> NP<sub>3-OBJECT</sub>  
 Kepe we þe strait wais..& robben hem her sustenance. (c1330 *Arth. & Merl.* 4323 (Kölbing))

奪われる人や奪われる場所のみを直接目的語に取る他動詞構文の(7)-(8)、さらにこれらの直接目的語の後ろに奪われる物を of 前置詞句により標示した(9)-(10)の構造はいずれも現代英語においても観察される。しかしながら、(11)の被奪取物のみを直接目的語に取る他動詞構文、(12)の from 前置詞構文、(13)の out of 構文、(14)の二重目的語構文は、動詞 rob の補部構造としてはいずれも現代英語では非構造的である。

本稿では(7)-(14)に示したように英語の歴史において様々な補部構造を取っていた動詞 rob についてその構造の変遷を考察することとする。

まず2節では古英語における除去・奪取動詞の統語構造を概観する。



現代英語においても(22)のように of 前置詞句を省略し、被奪取物を顕在化させずとも正文となる。

(22) Jesse robbed the rich (of all their money).

(Goldberg (1995:45))

次に rob が of 前置詞句と共に起る例を見てみる。OED における初出例は 1300 年代初頭である。<sup>4</sup>

(23) In an evil tyme our emperor Robbed King Richard of his tresour

(13.. Coer de L. 2286 / OED)

上で述べたように、rob はフランス語からの借入語であるが、フランス語借入語と‘of NP’構造との関連性について、中尾 (1972:219)は「F 借入語では「of-構造」が通例であるということを根拠にすると ME における「of-構造」の発達には F de (L de)が大きな役割を果たしていると推定される」と述べている。しかし、前述したように英語においても 14 世紀にはすでに屈折属格に代わる‘of NP’構造が十分に発達していたし、Visser (1963)の主張が正しいければ、古英語期の早い段階で除去・奪取動詞は of 前置詞構文を取っていたわけであるから、rob がフランス語から英語に借入された際に、(23)のような of 前置詞構文を選択したことはある意味自然なことといえる。

ところが、除去・奪取動詞の二重目的語構文は古英語期に消滅したわけではない。古英語の除去・奪取動詞の代表格であり、現代英語にも生き残っている bereave の二重目的語構文の OED における最終例は 1806 年であり、後期近代英語期まで除去・奪取動詞の二重目的語構文は存在していた。(14)に示したように rob も二重目的語構文を取っていた。以下(24)として再度例示する。

(24) Kepe we þe strait wais..& robben hem her sustenaunce.

(c1330 *Arth. & Merl.* 4323 (Kölbing) / OED)

(24)は OED における二重目的語構文を取る rob の初出例であるが、その年代は約 1330 年であり、これは(23)に挙げた of 前置詞構文の初出例の年代とほぼ同じである。Rob と同様にフランス語から借入された奪取動詞 deprive に関して、松元 (2003:50)は OED において当該動詞が前置詞構文に登場するのが c1330 年であるのに対して、二重目的語構文に現れるのがそれよりも約 100 年遅い c1450 年であることから、後期中英語期に deprive が英語に借入された時には新奇の外来語であったために明確に文法関係を表せるように、まず前置詞構文に生起したと考えられると述べ、さらに英語本来語の奪取動詞 bereave, reave がすでに二重目的語構文と前置詞構文に生起していたので、これを「モデルにして」、前置詞構文から二重目的語構文に拡張したと主張する。またこの拡張現象は他のフランス語借入動詞にも観察されると指摘している。具体的には dispossess は前置詞構文の初出が 1494 年で、二重目的語構文が 1607 年であり、disturb は前置詞構文が a1225 年で、二重目的語構文が 1533 年、spoil は前置詞構文が a1400-50 年で、二重目的語構文が 1622 年である。しかしながら、英語本来語 bereave, reave に倣った構文の拡張現象は、(23)-(24)に示した通り、rob には当てはまらないようである。

さらに(25)のように rob は 14 世紀後半には from 前置詞構文にも現れる。つまり、英語の歴史上、rob に関しては、ほぼ同時期に of 前置詞構文、二重目的語構文、from 前置詞構文が登場していたことになる。

(25) Allas! þat ricchesse shal reue and robbe mannes soule Fram þe loue of owre lorde.

(1377 *LANGL. P. Pl. B.* xiv. 132 / OED)

#### 4. 二重目的語構文の衰退

松元 (2003)は初期近代英語期に書かれた演劇や随筆等の 100 作品を対象にして、奪取・分離・排除を表す動詞が二重目的語構文と前置詞構文に出現する数を詳細に調査している。松元は動詞を「二重目的語構文と from 前置詞構文に現れる<banish タイプ>」「二重目的語構文と of 前置詞構文に現れる<bereave タイプ>」「二重目的語構文と from 前置詞構文/of 前置詞構文に現れる<兼有タイプ>」の 3 つに分けている。Table 1 に rob が含まれる<bereave タイプ>の調査結果のみを引用して示す。

Table 1 初期近代英語期における奪取を表す二重目的語構文と of 前置詞構文の出現数 (cf. 松元 (2003:48))

動詞	二重目的語構文	of 前置詞構文
bereave	6	38
debar	1	1
deprive	3	22
dispossess	1	2
disturb	1	0
reave	5	7
rob	1	74
spoil	1	1

Table 1 から明らかなように、初期近代英語期ではすでに of 前置詞構文の用例数が多い。古英語に遡ることができ *bereave* と *reave* はその他の動詞と比較すると二重目的語構文の用例は多いものの、フランス語借入語の動詞は of 前置詞構文の出現数が顕著である。特に *rob* は of 前置詞構文が 74 例であるのに対して、二重目的語構文はわずか 1 例のみである。OED における *rob* の二重目的語構文の初出例と最終例はそれぞれ c1330 年と 1613 年であり、おそらく中英語期の段階で二重目的語構文に定着することなく of 前置詞構文が確立したものと考えられる。

二重目的語構文よりも前置詞構文の方が優勢である一つの理由として松元 (2003:47) は「二重目的語構文という同一形式に授与を表す動詞と、正反対の奪離を表す動詞が現れるようになったために、両動詞がとる文形式を区別する必要が生じたことだと考えられる」と述べている。この指摘は的を射たものである。授与動詞が二重目的語構文に定着し、反対に奪取動詞が同構文から衰退した理由は各々の動詞の意味と二重目的語構文自体が表す意味とが関係していると考えられる。例えば、授与動詞の代表格である *give* の二重目的語構文における語彙概念構造は(26)のように標示される。

(26) Harry gave Sam a book.

$$\left( \begin{array}{l} \text{CS}^+ ([\text{HARRY}], [\text{GO}_{\text{Poss}} ([\text{BOOK}], \left[ \begin{array}{l} \text{FROM } [\text{HARRY}] \\ \text{TO } [\text{SAM}] \end{array} \right] ]]) \\ \text{AFF}^+ ([\text{HARRY}], [\text{SAM}]) \end{array} \right) \quad (\text{Jackendoff (1990:135)})$$

また Goldberg (1995:49) は二重目的語構文が表す意味を次のように規定する。

(27) X CAUSES Y to RECEIVE Z

即ち、(26)において‘Harry gave Sam a book’が表す事態は「Harry は本の所有権を自分から Sam に移動させることにより、Sam が本を所有する状態にした」ということになる。つまり、二重目的語構文の間接目的語には移動物を所有することのできる有生名詞(animate noun)しか生じることができない。二重目的語構文を取る動詞の多くは前置詞構文と与格交替をするが、その場合にこの意味的制約が働くことになる。<sup>5</sup>

(28) a. Mary sent Sue the book.

b. Mary sent the book to Sue.

c. #Mary sent France the book.

d. Mary sent the book to France.

(cf. Pesetsky (1995:124))

二重目的語構文の間接目的語の位置に無生物名詞 *France* が生じている(28c)は意味的に容認されない。なぜなら Mary が送った本をフランスという国が受け取ることはできないからである。<sup>6</sup> また、(28a)と(28b)は正文であるが各々の意味は等価ではない。(28a)は「Mary は Sue に本を送った(そして Sue はその本を受け取った)」という意味であるが、(28b)は「Mary は Sue に本を送った(しかし Sue がその本を受け取ったかどうかは分からない)」という



解釈になる。同様の例を(29)に挙げる。

(29) a. Mary taught Bill French.

b. Mary taught French to Bill.

(Goldberg (1995:33))

(29a)は「Mary は Bill にフランス語を教えた(そして Bill はフランス語を習得した)」を意味し、(29b)は「Mary は Bill にフランス語を教えた(しかし Bill がフランス語を習得したかどうかは分からない)」という意味である。(28b)や(29b)のように直接目的語と間接目的語の間に前置詞が介在すると両者の間には物理的・抽象的な「距離」が生じる。反対に二重目的語構文の(28a)と(29a)では間接目的語と直接目的語の間に距離が生じないために、(28a)では「本の所有権の移動」が、(29a)では「フランス語の知識の習得」が確実に履行されたことを含意する。

前置詞が「距離」を生むことは動能構文でも見られる。(30a)は「Bill はその犬を叩いた」を意味するが、(30b)は「Bill はその犬を叩こうとした(そして実際に犬を叩いたかどうかは分からない)」の意味である。

(30) a. Bill hit the dog.

b. Bill hit at the dog.

(Pinker (1989:104))

ここで除去・奪取動詞が英語の歴史において前置詞構文を選択し、二重目的語構文から衰退した理由が明らかとなる。構文文法の観点に立脚すれば、二重目的語構文が表す構文的意味は(27)に示したようなものであり、これは授与動詞が表す意味とは親和性が高いが、除去・奪取動詞のそれとは相容れないものである。よって初期近代英語期に除去・奪取動詞は授与動詞との競合に敗れ、二重目的語構文を放棄することになったと考えられる。

## 5. 現代英語における「NP<sub>1</sub> rob NP<sub>3</sub> from NP<sub>2</sub>」構造

最後に現代英語における動詞 rob の補部構造に関する事実を指摘しておきたい。既述の通り、被奪取物を直接目的語に取る(31b)は非文である。

(31) a. Jesse robbed the rich (of all their money).

b. \*Jesse robbed a million dollars (from the rich).

(Goldberg (1995:45))

(31b)に関して Goldberg (1995:232)はいくつかの方言では容認可能であるが、その場合、(31b)の rob は(31a)の rob とは異なる語彙記載項を持っていることになるであろう、と述べている。

しかしながら筆者が COCA を用いて調査したところ、rob が from 前置詞構文に現れている例が約 70 例ほど確認された。以下にその実例を数例挙げる。

(32) a. No need to add that she'd robbed the money herself from the new bank in Hommenaw in the company of those three worthies plus another since caught and hung by the authorities. (COCA : FIC 2013)

b. Skip came running back with money he'd robbed from a bakery. (COCA : MAG 2017)

c. Second, the Internet could steal business, just as it's robbing stock trades from the brokers. (COCA : MAG 1999)

d. And parts shortages are sometimes so acute that mechanics rob what they need from brand-new coaches. (COCA : NEWS 1995)

e. fire was robbing wood from future generations (COCA : NEWS 2000)

f. we are knocking out the existing ceiling and robbing some space from the attic. (COCA : FIC 2008)

g. The popular highprotein diets rob calcium from bones and strain your kidneys. (COCA : MAG 2001)

h. It was hard not to believe that in many ways he had robbed those seventeen years from her. (COCA : FIC 2012)

これらの例を根拠に rob が clear 型動詞と同様に現代英語において所格交替に参加すると考えるのは早計であると

思われる。3 節で rob の本質的な意味は「Rob は必ず被奪取者が深刻なマイナスの影響を受けることを含意する」であると述べたが、例えば(32f)からはそのような意味を読み取ることは困難である。動詞そのものの意味変化が統語に影響を与えていると考えるべきであろう。

## 6. 結 言

本稿では奪取動詞 rob の補部構造の変遷を歴史的に考察した。古英語において除去・奪取動詞は二重目的語構文を取っていたが、後期古英語期から始まる一連の名詞の屈折語尾の水平化に伴い、中英語期には二重目的語構文と前置詞構文とが共存することとなった。中英語期にフランス語から借入された rob はフランス語文法の影響を受け、フランス語の de 前置詞構文に相当する of 前置詞構文に生じることとなったが、of 前置詞構文とほぼ同時期に古英語由来の二重目的語構文にも生じていた。しかしながら、初期近代英語期に授与動詞との競合の末、除去・奪取動詞の二重目的語構文は衰退することになる。その理由は二重目的語構文の構文の意味が「授与」の概念と密接に結び付くものであるのに対し、それとは正反対の意味の「奪取」概念を表す rob は二重目的語構文が表す構文の意味とは相容れないものであったからであると論じた。また最後に現代英語において本来は非構造的とされる「NP<sub>1</sub> rob NP<sub>3</sub> from NP<sub>2</sub>」の実例が COCA には相当数見られることを指摘した。この構文の意味分析は今後の課題とし、稿を改めて論じることとする。

## 注

1. Levin (1993)は所格交替を行う動詞として clear の他に clean, drain, empty を挙げている。また, remove 型, banish 型, steal 型を from 前置詞構文のみを取る動詞として分類し, cheat 型を of 前置詞構文のみを取る動詞としている。詳細は Levin (1993:52)を参照のこと。
2. ‘They robbed the man of cash’のような構造は日本人英語学習者にとっては意味的に理解しづらいものである。そのため、この構造は二つの目的語の位置が転置した結果のものであるという主張を提案する先行研究がある(江川 (1991), 上野 (1995)など)。
 

(i) They robbed cash of the man.      →      (ii) They robbed the man of cash.

NP<sub>1</sub>      NP<sub>3</sub> ↔ NP<sub>2</sub> (転置)      NP<sub>1</sub>      NP<sub>2</sub>      NP<sub>3</sub>

「彼らはその男から現金を奪った」という意味を考えた場合、日本人英語学習者には(i)の語順の方が確かに理解しやすいと思われる。しかしながら、本論 2 節で述べる通り、(i)を基底構造として、そこから(ii)が派生したとする転置説は歴史的な言語事実には反する。
3. ここでの与格は本来「分離」の意味を表すラテン語の奪格に由来する。
4. (23)の出典表示の通り、OED では正確な初出年は不明であるが、この用例の次の例が 1340-70 年となっているため、(23)の例文は 1300 年代初頭であると推察される。
5. 例えば cost などのように二重目的語構文にしか現れない動詞もある。
 

(i) It cost me ten dollars.

(ii) \*It cost ten dollars to/for me.
6. ただし、(28c)は France を「フランスにいる人物」というメトニミー的な意味解釈をすれば容認可能である。

## 文 献

- Denison, D. (1993) *English Historical Syntax: Verbal Constructions*, Longman, London.
- 江川泰一郎 (1991)『英文法解説』金子書房, 東京.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Hall, J. R. C. (1960) *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, with a Supplement by H. D. Meritt, 4th ed., University of Toronto Press, Toronto.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press,

Cambridge.

Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, The MIT Press, Cambridge.

Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago.

松平千秋・国原吉之助 (1992) 『新ラテン文法』 東洋出版, 東京.

松元浩一 (2003) 「初期近代英語における奪取、分離を表す二重目的語構文」『近代英語研究』第 19 号, pp. 45-53.

松元浩一 (2006) 「初期近代英語における奪取と分離を表す二重目的語構文について」田島松二編『ことばの楽しみ—東西の文化を越えて—』南雲堂, 東京.

Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, Vol 1, Clarendon Press, New York.

Mustanoja, T. F. (1960) *A Middle English Syntax*, Part 1, Meicho Fukyu Kai, Tokyo.

中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』大修館書店, 東京.

入学直哉 (2013) 「OE *bereafian* と前置詞句」『福井工業大学研究紀要』第 43 号, pp. 478-488.

小野茂・中尾俊夫 (1980) 『英語史 I』大修館書店, 東京.

Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax : Experiencers and Cascades*, The MIT Press, Cambridge.

Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition : The Acquisition of Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Rosenbach, A. (2002) *Genitive Variation in English : Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Mouton de Gruyter, New York.

Simpson, J. (2009) *Oxford English Dictionary (=OED)*, 2nd Edition, Version 4.0, CD-ROM, Oxford University Press, Oxford.

寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』研究社, 東京.

*The Corpus of Contemporary American English (=COCA)*

上野義和 (1995) 「英語の論理：その教え方と学び方」『大阪外大英米研究』第 20 号, pp. 15-55.

Visser, F. Th. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, vol. I, E. J. Brill.

(2019 年 4 月 26 日受理)